

【論考】

「存立性 (consistance)」概念について

—フェリックス・ガタリにおける機械の問題—

尾谷 奎輔

序論

周知のように、20世紀後半に活躍した思想家であるフェリックス・ガタリ(1930-1992)は、フランスの哲学者のジル・ドゥルーズ(1925-1995)と共に『アンチ・オイディプス』(1972) や『千のプラトー』(1980) といった著作を公刊した。彼らの著作群において「機械」が重要な概念であり、また「機械」概念がガタリによって練り上げられたことは比較的よく知られている。ガタリ自身による、『分子革命』の英語版で版元の依頼により執筆された用語集のなかで、「機械」概念を次のように定義している。

機械は相互に産出しあい、選択しあい、廃絶しあい、新たな可能性の諸線を現出させる。広義の機械——たんにテクノロジー理論的・社会的・審美的等々の機械——はけっして単独ではなく、集合によって機能する。たとえば、工場のひとつのテクノロジー的機械は、社会的機械や職業教育機械、研究機械、商業機械などとの相互作用によって作動する (MR, p.289)。

この一節によれば、「機械」とは社会や技術といった様々なスケールの諸領域を接続する領域横断的な概念として定義されている。このような、領域を横断しつつ様々な諸要素を結合(ないし切断)するものとしての「機械」概念理解は多くの論者によって緩やかに共有されてきた。

しかし、ガタリが「機械にとっての問題は接続されるか、しないか」(RM, p.321) であると言明するとき、われわれにとって、領域横断的に「接続される」という事態そのものの内実が未だに不明確であり、「接続」という出来事の事柄そのものについて明らかにされていない。「存立性」という概念の解明が、様々な諸対象を「接続する」という事態の解明に直結するのであり、「存立性の獲得」の成否が「接続するか、しないか」という「機械の問題」に答えるものでなければならない。

本稿ではこれまで十分に論究されることがなかった「存立性 [consistance]」概念の内実を明らかにする。そして、「機械

の問題」とは「接続されるか、しないか」というガタリのテーゼは、臨床的实践や政治的实践を架橋とする「機械」概念を核心とするガタリ思想において、「存立性の獲得」という問題に集約されることを示す。

本稿の議論構成は以下のとおりである。第一に、問題の所在を明確にするために、「存立平面」および「存立性」概念に関する研究状況を概観する。第二に、1971年の草稿「存立平面」およびその草稿をもとにした『分子革命』版の「存立平面」(1977)で参照される論理学者のロバール・ブランシェの『公理系』(1955)を通じて、数学における「存立性」概念について確認しつつ、『公理系』の議論の限界について検討する。第三に、ガタリが物理学者のジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン(1901-1991)の議論から、機械的な「存立性」概念としての性格を取り出したことを明らかにする。以上を踏まえ、「存立性」概念の存在論的側面と社会的側面について検討したのち、議論を総括する。

1. 問題の所在

まず確認しておきたいのだが、『アンチ・オイディプス』出版のために準備したガタリの草稿のなかで、ガタリは自らの概念として「存立性」概念を使用し始める。ガタリは、なかでも「ふたつの切断」と名付けられた『草稿』で、「実体 (substance) にとって代わるもの、それは存立性 (consistance) だ」(EACE, p.379) というテーゼを提示している。哲学の歴史のなかで問い直され続けてきた「実体」概念は、何が存在するが、何をもちて存在者足り得るかという存在論的論究において、それに応答する主張を展開するために継承されてきた概念である。上記のテーゼからわかるように、「存立性」概念は、ドゥルーズとガタリとのあいだで共有される重要な概念として議論の対象になってきた。「存立性」概念は71年の「存立平面」と題された草稿で練り上げられたものであるが、80年代後半以降の著作『分裂分析的地図作成法』(1989)や『カオスモーズ』(1992)で「存立性」概念の重要性を確認することができる。

本稿では、「スキゾ分析」という用語についての理論的特徴および臨床的意義について立ち入らないが、ガタリは独自の臨床的実践である「スキゾ分析」と「存立性」概念を以下のように結び付ける。スキゾ分析は「潜在的な岐分と差異化の線が存立性を獲得するように働きかける」(Ch p.89)。また、「集団的言表行為」という用語についても深く立ち入らないが、政治的実践と深く関係する「集団的言表行為」と「存立性」の関係は次の一文によって簡潔に例示することができる。「レオナルド・ダ・ヴィンチが飛行機を空想したとき、彼はそれをデッサンし、設計図を描いたが、事態はそこから進まなかった…しかし、それ以後この問題は存立性を獲得した。すなわち、この問題は集団的言表行為をもつようになった」(CS,176-177)。つまり、「スキゾ分析」のような臨床的実践、あるいは社会実践的な「集団的言表行為」は「存立性の獲得」が焦点になっている。

さらに、ドゥルーズとの共著作『哲学とは何か』(1991)では哲学の営みを概念創造とし、「哲学の問題は、思考が浸っている無限を失うことなく、ある存立性を獲得することである」(QP,45)という文言は「存立性」の重要性を示している。

これまでの研究では、「存立性」の派生概念である「存立平面」がガタリの思想の核心をなすと指摘されてきた。例えば、Watson はジャック・ラカンのマテーム(数学素)の対抗概念として「存立平面」および「存立性」概念を構築し、70年代初頭から最晩年にかけて、ガタリに内在する思想の中心的役割を担っていると指摘している(Watson [2009], p.63-64)。

しかし、存立平面(plan de consistance)の理解には、まずもって存立性(consistance)の理解が必要である。なぜなら、「存立平面」は、草稿「存立平面」のなかで「非存立性の原則」であると定義されるが、当の「存立性」の概念規定が十分ではないからである(EACE, p.408)。

たとえば、ドゥルーズとガタリの共著研究の観点からダヴィッド・ラブジャードは、「存立性」を簡潔に物質の「関係の安定性」として特徴づけており(Lapujaded [2014], p.186)、またピエール・モンテベロは「存立性」概念について一章分を割き、『千のプラトー』から遡及して、60年代のドゥルーズの著作群を参照しながら個体化論について論じている(Montebello [2008], p.97)。しかし、両者ともにガタリ自身のテキスト群を精査していないため、「存立性」概念について十分に明らかにしていない。また、ガタリの単著研究の観点から、Watson は「社会的、心的なものの形成を取り纏める最小限の一貫性」⁽¹⁾として「存立性」概念を定義しているが、その一貫性がいかにして保持されるのかを十分に明らかにしていない(Watson [2009], p.164)。

もちろん、序論で述べた通り従来の研究でも、存立平面の哲学上の意義は議論されてきた。たしかに、現在の研究でもドゥルーズの「実体」概念の変容という観点から「存立平面」概念の解明に着手されていることは認められつつある⁽²⁾。

しかし、ガタリによる「存立平面」の意味内実を検討した上で、当の概念がドゥルーズ哲学における「実体」概念の変遷に深く関わっていることについては十分に議論されていない⁽³⁾。Igor Krtolica は、存在論から政治哲学への移行という観点から、1960年代から1970年代にかけてのドゥルーズのスピノザ読解における「実体」概念の変遷に着目している(Krtolica [2021], p.39-41)。しかし、ガタリがドゥルーズの「実体」概念の変遷に関与していないと判断した上で(Krtolica [2021], p.32)、ガタリが練り上げた当の「存立平面」の意味内容について論究していない。本論では上記の先行研究を踏まえつつ、「存立性」、「存立平面」について議論する。

2. 「数学的存立性」について

まず、当時のフランスの哲学史研究において流通していたと思われるconsistanceという語の用法について、アンドレ・ラランドによる『哲学の技術的批判的辞典』の「存立性(consistance)」の項目を確認しておきたい。以下のように定義されている。①「つかみどころがなく、矛盾しない思考の特性、教義や議論の論理的な堅さ。より特殊な言い方をすれば、公理系が無矛盾であれば一貫性があると言う。」②「堅実で、恣意性や偶発的な状況に依存せず、永続性と客観性のある性質を持つものこと」であると記されている(André Lalande, [2006], p.177-178)。ただし、ガタリの「存立性」の意味内実は無矛盾性や堅固さ、安定性といった従来の「存立性」理解以上の含意が見いだされる。

当の「存立性」概念は1971年の「存立平面」と題された草稿で練り上げられたものであるが、ガタリは『分子革命』所収の「欲望のミクロ政治学に向かって」のなかで、数学的公理体系から「存立性(consistence)」の概念を借用して「機械状存立性」を練り上げたことを明確に述べている。また、「存立性」概念は70年代初頭に形成され、その下位区分として「数学的存立性」と「機械状存立性」が導入されていることが、1971-72年にかけて執筆された「存立平面」と題された草稿および、『分子革命』では以下のように、「数学的存立性」と「機械状存立性」を区別している。

① 数学的存立性は公理系が無矛盾であるという事実のうちにある。

② 機械状存立性は、それが多様体を全体包摂的なひとつの

記号的集合に多様体を適用するという二元論的体系に依拠しない限りこの要件を逃れる。したがって、機械状存立性は単なる論理的矛盾を「恐れ」ない。(RM, p.314, EACE, p.461)

「数学的存立性」は「無矛盾である」と定義され、「機械状存立性」は「論理的矛盾を「恐れ」ない」と定義される。「草稿」の注釈に記されているように、「存立性」に関する直接的な参照は20世紀のフランスの科学認識論者、数理論理学のロベール・ブランシエの『公理系』(1955)のみである(RM, p.314, EACE, p.407, p.461)。本節では、まず、「数学的存立性」について検討するため、ロベール・ブランシエの『公理系』を参照する。

ロベール・ブランシエは本邦では殆どその名が知られていないが、彼の『公理系』は、フランスで1955年の初版以来、何度か再版されている。数理論理学の専門外の読者を対象とした一般書であるこの本は、公理の歴史的発展について解説している。彼は、その起源をユークリッド幾何学に置き、19世紀後半の非ユークリッド幾何学の出現を受けて、公理系が形式化され、学問としての自律性を高めていく様子を描いており、科学における公理の意義や哲学への影響についても考察している。

まず、公理についてごく簡単に説明する。公理とは、その他の命題を導出するための前提として導入される最も基礎的な定義である。一つの形式体系における議論の前提として置かれる一連の公理の集まりを公理系と呼び、無矛盾性、あるいは存立性(consistance)が公理の条件である(AX, p.48)。

公理系の中で、ある体系についての無矛盾性がもし成立しているのであれば、その体系内部で当の体系の正しさ、整合性が証明されなければならない。つまり、任意の命題に対し、それが成り立つか、成り立たないかいずれか一方であり、その中間はないという論理学の規則である「排中律」を採用している(AX, p.50-51)。要するに、数学的な存立性は排中律によって律せられる。しかし、公理論的集合論の発展のなかで、数学のいかなる公理系もその内部には証明も反証も不可能な命題が含まれていることが明らかになる。

ある公理系内に、矛盾する二つの命題があると(4)。そのいずれもが真偽を証明できない場合、それらの命題は「決定不可能」である(Warusfel [1966], p.257)。「決定不可能な命題」とは、ある公理の体系が与えられたときに、それらの公理に関して真でも偽でもない命題のことである。そして、公理系の内ある、数えられない集合である「連続体の濃度 (la puissance du continu)」は公理によって処理できない(Warusfel [1966], p.355)。換言すれば、算術を含む複雑な形式体系では、その体系内で証明も反証もできない命題が存在する。

その場合、形式体系それ自身の存立性、無矛盾性を証明することができない。つまり、数学的体系のなかで、排中律を適応できない命題が含まれている。

ガタリの草稿「存立平面」では、「公理化され得ない」次元を「機械的な多様体」として定義しており、「機械」は諸要素を非等質的なまま総合するものとして示される。確かに、ブランシエは「連続体」について触れつつ、数学的体系の内部に「公理化され得ない」次元を指摘している(AX, 88-91)。しかし、「公理化され得ない」水準が介入しようとも、無矛盾性を意味する「数学的存立性」が数学の公理化の要件を支えている。それに対するガタリの公理に関する見解は、以下の文言に表れている。

われわれが確立しようとするのは、あらゆる部分的機械体系が、ひとつの公理系のなかにもまったく包摂されえない——そして、少しも表象機能をもたず、無限に脱全体化、脱領土化、脱公理化された——ある同一の存立平面のなかで調和することである。(RM, p.320)

ガタリによれば、存立平面の「平面」とは、連続体⁽⁴⁾としての性格を表しているが、前述したようにそのそれは排中律に適用することができず、数学的な言表以前の「公理化され得ない」水準の機械の領野である(EACE, p.461)。そして当の「存立平面」とは社会体や技術体系などの諸相の総体が横断されることを可能にすると説明される(RM, p.325, EACE, p.477)。

「数学」の公理系において「公理化され得ない」という次元が見いだされるが、それは排中律に律せられる限りにおいて析出されるものであり、社会的領野への参入の契機を見出し得ない。一方で、排中律に律せられるという数学的前提を有していない「存立平面」の原則のもとで「機械状存立性」は定位される。ガタリにおける「機械の問題」は、排中律による命題の真偽ではなく、ある諸要素同士が「接続するか、しないか」であり、これが「機械状存立性」の基本的性格である(RM, p.321)。

つまり、「機械状存立性」の諸要素の多様な結合は、機械的な「存立平面」を介して行われる。言い換えれば、「存立平面」は、「機械状存立性」が多種多様に総合する条件そのものであると言える(RM, p.314, EACE, p.461)。よって、ガタリの視点において「数学的存立性」にまずもって欠けるもの、それは全く異なる諸要素との総合である。ブランシエの『公理系』のなかに「機械状存立性」の意味内容に関わるような議論は展開されていないが、数学における「存立性」に関する議論は確認できる。ブランシエによれば公理系の応用は数学だけでなく物理学をはじめとして、様々な領域に段階的に波及したという(AX, p.84)。しかし、ブラン

シエは『公理系』のなかで物理学の公理主義的な演繹的手法が重視される傾向を認め、通時的、段階的に物理学が数学によって基礎づけられる過程を記述しているが、「数学と物理学とのあいだの相互依存的」な関係を提示していない。「機械状存立性」は、このような段階的な発展のなかには見出し得ない。次節では「機械状存立性」について検討する。

3. 「機械状存立性」について

本節では、物理学者のジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン⁵の議論を参照しながら、「機械状存立性」について検討する。先述したように「機械状存立性」は「論理的矛盾を「恐れ」ない」と定義されている。付言すれば、「数学的存立性」とは異なり、「存立平面」が介在する「機械状存立性」は排中律によって律せられない(EACE,p.462)。

ガタリは、レヴィ＝ルブロンに依拠しつつ、数学を抽象物、物理学を具体物にするような関係性によって両者を位置づける比較的一般的な見解を退けていた。ガタリはレヴィ＝ルブロンに依拠しながら、二つの矛盾する傾向を指摘する。すなわち「(1) 数学の自律化への傾向、(2) 数学と物理学との相互依存への傾向」(EACE,p.466-447)である。つまり、数学と物理学とのあいだには互いに区別される自律的かつ相互依存的、多産的で動的な関係が機能する。

レヴィ＝ルブロンは「ユニヴェルサル辞典」⁽⁶⁾の「物理学と数学」という項目の中で物理学と数学の関係について、多かれ少なかれプラトニックな解釈を明確に否定する必要があると主張している。

それは、物理学者の仕事を、物理的現象の複雑さの下で、数学的關係によって表現されたポアンカレが言うような「物事の隠された調和」的な関係を単純に解釈することだと考えてしまうことになるという。バシュールが言うような「科学史の支配的な原動力である漸進的な数学化」でもなく「生産的關係」ないし「構成的關係」が重視される。

それは、物理学者の仕事を、物理的現象の複雑さの下で、数学的關係によって表現された「物事の隠された調和」的な関係を単純に解釈することだと考えてしまうことになるからである。そうではなく、逆に数学の方程式の側から物理学概念が形成され得るのであり、双方向の關係性が見出される。ガリレオの物体の実験が数学的概念である「導関数」の創出を導いた歴史的事実を鑑みれば、物理学が数学に対して一方的に依存するのではなく、数学もまた物理学に依存している。つまり、数学は公理系によって、物理学は実験によってそれぞれ自律性を保ちつつ相互依存しているのであって、数学と物理学の關係性はどちらか一方に還元さ

れて、一つの全体として統合されるわけではない。

物理法則の数学的多義性に対応して、数学的構造の物理的多義性を喚起することで、物理的概念と数学的概念の間にあらかじめ確立された調和があるという幻想を払拭する。数学と物理とのあいだの対一対一対応の關係ではなく、多対多の可塑的な關係が見出される。より詳述すれば、数学の微分方程式は物理学における力学的振動や電氣的振動という物理法則を記述する(物理学における多価性(plurivalence))、逆に物理学の振り子運動は、微分方程式や変分原理によって記述される(物理学の数学的多様性(polymorphisme))。レヴィ＝ルブロンによればこの多価性の重要性を指摘した代表的論者がファインマンであり、一方で、数学多様性の重要性を特に指摘したのがポワンカレであるが、両者の立場は対立するものではなく、調停可能であると指摘する。

「科学史の支配的な原動力である漸進的な数学化」という通時的な発展ではなく「生産的關係」ないし「構成的關係」という共存的な關係が重視される。数学と物理学との關係は、数学を抽象物、物理学を具体物にするような關係性によって規定されるのではない。そうではなく、数学の中には、公理化によって自律する傾向がある一方で、物理学との結びつきを求め続けるという、二重の矛盾した働きが見られる。この事態をわれわれは、「自律と相互依存の二重性」として定式化できるだろう。この機能が「機械状存立性」とガタリによって名付けられた当のものであり、排中律によって律せられるのではなく、「接続される、しないか」という原則に依拠する限り、「構成的關係」は多様な仕方で構成される。

4. ガタリにおける「存立性」

ガタリは「実体」概念を拡張する「存立性」概念を用いて、理論物理学における理論的対象の存在の証明についての主張を展開する。

ある存在の証明において、物体と当の命題を一対一対応させる指示作用が介入して判定するのではなく、理論物理学では外在的な指示対象を持たずに理論的対象を操作できる。実際、例えば理論物理学における記号と指示対象との対置は、ある程度の妥当性を失っているように思われる。今日、ある粒子の存在に実証的な証拠を与えることはもはや要求されない。理論的記号論の総体のなかでその粒子を矛盾なく機能させることができれば十分なのである。…かつて基本的であった、時空間的測定の物理的効果によってその存在を物質化するという目標は放棄されたのである。

(RM,244)

ある「粒子」が存在者足り得る原因、換言すれば経験的観測以前の理論的存在者の存在の条件は、何かに一方的に依存している階層的関係に求められるのではなく、数学と物理学とのあいだの共存的な関係に求められる。つまり、純粋数学という基礎の上で、物理学が成立している前提を固持するのではなく、理論の対象は何らかの基礎的な学知に一方的に依存していないという視点をとる。

「粒子」の实在は、数学と物理学の「自律と相互依存の二重性」、「構成的関係」によってまず根拠づけられるのであり、事後的に、科学共同体による合意、資本の投入、実験設備の設立によって観測される。これは、社会的共同体の社会的合意が先立って「粒子」の存在が指定されるのではなく、科学共同体による配備に先立って、構成的関係が理論的对象である「粒子」の存在の条件を規定しているのであり、その逆ではない。つまり、「存立平面」は権利上、社会的構成体に対して常に先立って機能する。

「科学的諸連鎖という人工物 (L'artifice) は、自然界には存在しない粒子、途方もないアレンジメントを生産する」(EACE, p.471) とガタリはいう。ガタリが導入した「存立性」は、1960年代におけるドゥルーズの「実体」概念を基底とした存在論には見られなかった自然物に限定されない科学的な理論的对象などの人工物⁽⁷⁾にまでその存在論的圏域を拡大し、諸対象と社会との不可分性を描いている。「機械状存立性」によって構成された「粒子」のような人工物を介することで形而上学的な存在論から政治的領野への移行を可能とする。

存立性の導入は、実体概念を形而上学から脱化し、社会的領野のなかで存在論を再び構築するために準備されたものであり、ドゥルーズの「実体」概念が「存立平面」によって再構築された存在論が社会的圏域への移行を可能にしたことを理解することができる。

ガタリは1971年の時点で、1970年代後半頃から興隆した科学技術社会学を牽引したバリー・バーンズ『新しい科学の社会学』(1974)、ブリュノ・ラトゥール、スティル・ウルガー『ラボラトリー・ライフ』(1979)に先立って、社会体と科学的対象との不可分な関係について考察していた⁽⁸⁾。ガタリは晩年のインタビューで、ブリュノ・ラトゥールらの科学技術社会学に対して共感を示していたが、1971年の時点ですでにガタリのなかに科学的対象と社会体、政治権力との分かち難い相互連関を描いている(QE, p.183)。

数学的記号体系と物理学の環境、科学共同体との節合によって「素粒子」の存在の条件を形成するのは「実験的—結合的であると同時に理論的—結合的であるシステムに属している剰余価値が形成される場」にほかならない。従って、数学と物理とのあい

だの「生産的関係」は「剰余価値が形成される場」と結びつけることができるだろう。そして理論物理学の領域で喚起した例は、ほかの社会的領野等において展開可能であるという。

剰余価値の例として何度も繰り返し挙げられるのは蘭と雀蜂の結合関係である(EACE, 470)。これは、植物と動物の共生あるいは共進化のひとつの例であり、蘭が自身の生殖活動にオスの雀蜂の生殖行動を利用し、蘭と雀蜂は、互いの機械的プロセスに自分自身を挿入することで、その相互作用の複合的な効果が、遺伝的にプログラムされたものでも、どちらかの種の記号的なコードに還元できるものでもなくなる。スズメバチは蘭を別のスズメバチだと信じて出会いから何も得られないが、蘭は受粉によって自己再生産性を行っている。それゆえ、蘭と蜂はそれぞれ結合関係を交わしつつ、自律性を保っている。

雀蜂と蘭はそれぞれ固有の領土(テリトリー)に属しているが、この異種間の出会いは固定的なテリトリーから逸脱すると同時に新しい関係を確立する契機になる。花粉の生殖質の流れから剰余を取り出すだけではなく、蘭と雀蜂のあいだで、既存の集合に還元できない「数えられない集合」が形成され、当然数学的な公理系とは峻別される(横断変換的記号の)「特異な公理系」が新たにつくられる。この「特異な公理系」とは、当然のことながら「数学的存立性」によって成立する類のものではなく、「機械状存立性」によって成立するものである。

「機械にとっての問題は接続されるか、しないか」(RM, p.321)という「機械状存立性」の問題は「公理化され得ない」場であると同時に「機械」的で「生産的」な場である存立平面から、「機械状存立性」の性格を持つ生産物を産み出すことである。それゆえ、問題はいかにして異質な諸要素を統合せずに総合するような「自律と依存の二重性」を形成するかということに帰する。そして、ガタリが「理論物理学の領域で喚起した例は、社会的、芸術的等々の他の諸領域において展開することができる」(RM, p.244)と言及するように、「存立性の獲得」の問題はより広く展開される⁽⁹⁾。

結論

本論では、従来の研究では深く論究されなかった「存立性」概念について検討した。まず、「数学的存立性」について検討したが、「数学的存立性」は排中律によって律せられる一方で、「機械状存立性」は排中律に律せられない点において両者のあいだの本性の差異がある。

ガタリはレヴィ＝ルブロン⁽¹⁰⁾の議論から、数学的な公理系と物理学という本来異質な領域を繋ぎ、公理化の条件である無矛盾性を意味する「数学的存立性」と峻別される、諸要素を節合する「機

械状存立性」および「存立平面」を析出したと解した。レヴィ＝ブルブロンは社会体の諸領域を横断する存在論的側面と社会的側面を提示している訳ではないが、ガタリはその数学と物理学の複合化に伴うその両側面を前面化する。

「機械状存立性」と「存立平面」が上記の議論から着想を得たことは間違いないのだが、ガタリは科学哲学、あるいは数学の哲学の推進を試みた訳ではない。重要なのは、理論物理学の例から、

一つの全体として統合されることのない「生産的關係」ないし「構成的關係」、別言すれば、社会的な諸層の総体を横断しつつ多種多様に「機械状存立性」を生産する場である「存立平面」を描出したという点にある。「存立平面」はそうした共存的な結合関係を構成する場なのであり、「関係を欠いた」諸要素の総合は、階層性を払いのけると同時に、社会的構成体に対して現実的に働きかける契機となる⁽¹¹⁾。

注

- (1) また、いかにして「社会的、心的なものの形成を取り纏める最小限の一貫性」が保たれているのか十分に明らかにされていないほか、その最小限の安定性が粒子などの理論的対象物が数学的構造（具体的には代数幾何学）に決定的に依存しているというルネ・トムの「構造的安定性」という概念に相当するものとして提示している(Watson, 2009, p.64)。「存立性」が物理法則のなかに数学的な構造を見出そうとする「構造的安定性」という概念に相当するという主張は、本論の立場とは異なる。
- (2) ガタリとの協働を経て、ドゥルーズが論考「スピノザと私たち」(1981)のなかで、スピノザの「実体」概念に代わって、「存立平面」を導入していることが確認できる。そのなかで、スピノザの「唯一実体の肯定」ではなく、「存立平面」(「スピノザと私たち」において「内在平面」と「存立平面」は等価である)に視点を移していることがわかる(SPP,p.271)。また『千のプラトー』(1980)等においても、スピノザの「実体」が、存立平面(およびその個体化の原理である「器官なき身体」)の導入によって再考されていることが確認できる(MP,p.191)。
- (3) ガタリ単独の仕事には触れていないものの、「内在」に関連する思想的検討と関連づけつつ、ドゥルーズの「実体」概念および「存立平面」概念の変遷を追跡する意義深い研究(近藤 [2020])を参照されたい。
- (4) ガタリは「決定不可能な命題」と「連続性の濃度」について、Warusfel[1966]の数学用語を参照している。
- (5) puissance du continuum という用語の puissance は日常的な意味での「力」などのほかに、数学では「べき乗(累乗) exponentiation」の意味と集合論での「濃度 cardinalité」の意味で用いられる。ブランシェは次のように述べる。「無限の集合では、最も小さい濃度は、数えられる集合(自然数の無限級数)の濃度であり、連続体の濃度 [la puissance du continu] (例えば、線上の点や実数の集合)は、数えられる集合の濃度よりも大きいということ、そして最後に、どのような集合であっても、濃度がどのような集合よりも大きい集合は、常に構築することができることを思い出してください」(Blanché,[1955],p.88,n.1)。
- (6) Lévy-Leblond, Jean-Marc[1989].
- (7) 山森(2018)は、『アンチ・オイディプス』第二章の修正箇所を伝える手紙のなかで、ガタリがドゥルーズに対して artificiel および artificiel の用法を捉え直すように促している手紙に着目しており、ドゥルーズとガタリの両者の自然観の差異に着目している。
- (8) Lecourt[2001]p.124を参照されたい。
- (9) ガタリがたびたび例示する異種間交配について、蘭と雀蜂はそれぞれ固有の領土(テリトリー)、種の系統(filiation)に内属しているが、蘭が視覚的な類似性を頼りに雀蜂の形態を模倣しつつ擬態化することにより、相手を引き寄せ、花粉の生殖質の流れから剰余を取り出すという。次いで異種交配による共進化的な関係に入り、全く「関係を欠いた」系統同士の間で交差が形成される(EACE, p.337-338)。蘭は生殖行為の為に雀蜂に利用し、他方の雀蜂は擬態化した蘭との倒錯的な享楽を得ており、全く異なる系統の総合が行われる。この「関係を欠いた」共存的な結合を封鎖してしまう歴史的な通時性を保つ権力的構成体をガタリは政治的問題として提起している。

- (10) 主にラカンの精神分析から引き継いだ欲望という主題において、欲望は存立性を喪失させるものとして説明され、別の本性の存立性を定立させる契機として提示される。草稿版の「存立平面」に記されるように、諸構造の公理系とは異なる「欲望の公理系は非共立性の原則を含んでいる」といい、欲望は存立性を喪失させるものであると同時に社会変革の契機を含んでいるという(EACE p.407)。存立は恒常的なものではなく、つねに欲望による喪失の契機を含んでいる。その存立性の結合と喪失によって、別の本性の法則を打ち立てるような「機械状のものにおける永劫回帰」(EACE, p.321)という差異化の回帰がなされる。
- (11) 1966年に、アルチュール・ゲルールの門下を中心にエピステモロジー・サークルが結成され、『分析手帖』が刊行される。第一号の特集「真理」には、ラカンが「科学と真理」を寄稿し、フレーゲの数理論理学を精神分析の立場から扱ったラカン派のミレールの「縫合」論文が掲載され、アルチュールは縫合概念を彼の政治的思想に取りいれている。そして、精神分析と数理論理学を合流させる60-70年代の構造主義の言説に対抗するべく、ラカンらとの緊張関係の中、ガタリも同様に精神分析と数理論理学と結びつけ、独自に「存立性」概念を練り上げたと考えることは可能だろう。

文献表

一次文献

略号表

[RM]: Félix Guattari, 1977, *La révolution moléculaire*, Paris, Encres.

[MR]: Félix Guattari, 1984, *Molecular Revolution: Psychiatry and Politics*. Trans. Rosemary Sheed, David Cooper, London, Penguin.

[CS]: Félix Guattari, 1989, *Cartographies schizoanalytiques*, Paris, Galilée.

[Ch]: Félix Guattari, 1992, *Chaosmose*, Paris, Galilée.

[EACE]: Félix Guattari, 2004, *Écrits pour L'Anti-Œdipe*(publication posthume. textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud), Paris, Lignes.

[QE]: Félix Guattari, 2013, *Qu'est-ce que l'écosophie ?*, 1985-1992 (posthume, recueil d'articles agencés par Stéphane Nadaud), Paris, Lignes.

[MP]: Gilles Deleuze et Félix Guattari, 1980, *Mille Plateaux : Capitalisme et schizophrénie 2*, Paris, Les Éditions de Minuit.

[QP]: Gilles Deleuze, 1991, *Qu'est-ce que la philosophie ?*, en collaboration avec Félix Guattari, Paris, Les Éditions de Minuit, coll. « Critique » .

[AX]: Roberte Blanché, 1955, *L'axiomatique*, Paris, PUF.

参考文献

André Lalande, 2006, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Paris, PUF.

André Warusfel, 1966, *Dictionnaire raisonné de mathématiques*, Paris, SEUIL.

Christian Kerslake, 2008, «Les machines désirantes de Félix Guattari, de Lacan à l'objet «a» de la subjectivité révolutionnaire» in *Multitudes*, 34, Paris, Amsterdam.

David Lapoujade, 2014, *Deleuze, les mouvements aberrants*, Paris, Éditions de Minuit. [『ドゥルーズ——常軌を逸脱する運動』堀千晶訳、河出書房新社、2015年]

Dominique Lecourt, 2001, *La Philosophie des sciences*, Paris, PUF. [『科学哲学』沢崎壮宏、竹中利彦、三宅岳史訳、白水社 2005年]

Igor Krtolica, 2021, *Philosophie Critique et Philosophie Politique*, in *ARCHIVES DE PHILOSOPHIE*, Tome84, Paris, Centre

Sèvres.

Janell Watson, 2009, *Guattari's Diagrammatic Thought Writing Between Lacan and Deleuze*, London, New York City, Continuum Studies in Continental Philosophy.

Lévy-Leblond, Jean-Marc, 1989, "Physique: C, Physique et mathématique." In *Encyclopaedia Universalis*, 270-274. Paris Encyclopaedia universalis.

Pierre Montebello, 2008, *Deleuze, la passion de la pensée*, Paris, J.Vrin. [邦訳『ドゥルーズ 思考のパッション』大山載吉、原一樹共訳、2018年]

江川隆男、2014、『アンチ・モラリア』、河出書房新社

江川隆男、2019、『すべてはつねに別のものである』、河出書房新社

近藤和敬、2020、『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する〈内在〉の哲学試論』、講談社

山森裕毅、2018、「artificeの哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学—フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より」、『hyphen』第3号, p.5-10。

<https://dglaboratory.files.wordpress.com/2018/05/e38090e8ab96e88083e38091e5b1b1e6a3aee8a395e6af85e3808cartificee381aee593b2e5ada6e381a8e38088e99b80e89c82-e898ade38089e381aee6a99fe6a2b01.pdf>

(最終アクセス日：二〇二三年八月二五日)

山森裕毅、2019、「スキゾ分析の初期設定」、『ドゥルーズの21世紀』、河出書房新社, p183-206